

1 国語

☆言葉による見方・考え方

『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語編』では、「生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着眼して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること」と説明されています。

例えば「you」と同じ意味を表す語を、日ごろ何通り使い分けていますか。同じ相手でも、場所や状況、その時の心情によって使い分けているのではないのでしょうか。

何気なく使っている言葉の表現意図や表現効果、文化的背景について生徒が「考え」「気付く」ような授業を目指しましょう。

☆「古典を学ぶ意義」

今を生きる生徒達がなぜ古典教材を学ぶのでしょうか。その意義について、まず教員自身が見解を確立することが必要です。そのうえで生徒自身が古典を学ぶ意義について「考え」「気付く」ことができるように、

- ・先人のものの見方・考え方に触れ、生徒自身の経験や考えと比較しながら考えを広げたり、深めたりする。

- ・原文を題材とした文章（解説や評論等）を副教材として活用する。

といった活動を効果的に取り入れた授業づくりをすることが大切です。

言葉への自覚を高める授業

言葉は、人が人として暮らすための大切な基盤の一つです。「言語に関する能力」を高めることは、あらゆる意味で人生を豊かにすることにつながります。

学校教育の中で「言語に関する能力」の育成を目指し、直接かつ計画的に指導を行うのは国語科です。その役割と責任は極めて大きいと言えるでしょう。国語科の授業では「言葉」にこだわり、生徒が言葉への自覚を高められるようにすることが大切です。

教材「を」ではなく、教材「で」学ぶ

指導事項（身に付けさせたい資質・能力）が異なれば、同じ教材であっても授業の展開は変わります。同じ『羅生門』でも、下人の心情変化を学びの主軸に据えるなら、場面ごとに丁寧に読み進める活動が効果的です。原典である『今昔物語集』との比較は、作者の執筆意図の探究につながります。目標に合った最適な学習活動はどのようなものか考え、計画することが授業づくりの第一歩です。

→ 2章-7

一つの単元で学ぶ領域を一つに絞る

国語の授業で身に付けさせたい「思考力、判断力、表現力等」は「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の三つの領域に分けられます。これらを偏りなく身に付けさせようと、これまでは一つの単元であらゆる学習活動を取り入れる授業が見られました。しかし、それでは焦点がぼやけ、生徒には学ぶべきことが伝わりにくくなります。

そのため、国語の授業づくりにおいては「一単元一領域」の原則に従って指導計画を立てることが重要です。どの領域の学習をどのような活動によって育成するか、ねらいを定めて指導します。

なお、このとき注意すべきことは、

領域と言語活動の内容は必ずしも一致しない

ということです。教材の内容理解を深めるための話し合いであれば「読むこと」、説得力ある伝え方を身に付けるための話し合いであれば「話すこと・聞くこと」の領域の資質・能力を育成する言語活動となります。「この言語活動はこの領域の力を身に付けさせる活動として適切か」を常に自問しながら言語活動を設定しましょう。

各科目のねらいを踏まえて指導計画を立てる

より良い学びを実現するために、平成30年度告示の学習指導要領で、国語の科目は資質・能力ベースへと改編が行われました。

授業づくりにおいては、どのような資質・能力を身に付けるためにその科目が設定されているか、各科目の目標と指導内容について教員が理解し、適切な指導計画を立てる必要があります。

【共通必修科目】標準2単位

現代の国語

実社会・実生活に生きて働く国語の能力を育成する科目

言語文化

上代から近現代につながる我が国の言語文化への理解を深める科目

【選択科目】標準4単位

論理国語

多様な文章等を多角的・多面的に理解し、創造的に思考して自分の考えを形成し、論理的に表現する能力を育成する科目

文学国語

小説、随筆、詩歌、脚本等に描かれた人物の心情や情景、表現の仕方等を読み味わい評価するとともに、それらの創作に関わる能力を育成する科目

国語表現

表現の特徴や効果を理解した上で、自分の思いや考えをまとめ、適切かつ効果的に表現して他者と伝え合う能力を育成する科目

古典探究

古典を主体的に読み深めることを通して、自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値について探究する科目

<例>言語文化「読むこと」の学習活動例

言語文化の例として、『羅生門』を教材に指導事項「B読むこと(1)ウ」を身に付けさせるための学習活動を紹介します。

言語文化 「B読むこと(1)ウ」

文章の構成や展開，表現の仕方，表現の特色について評価すること。

【学習活動】

本文の構成や展開、場面設定に留意しながら紙芝居にする。

作品をモチーフにして「リライトする」活動です。紙芝居は、どこで場면을切り分けるかを考える活動が中心となりますので、構成や展開を学ぶことに効果を上げます。

※注意事項：ここで紹介した例は「書く」活動ですが、「読む」力の育成をねらいとした活動ですので、この場合の学習評価は、「書くこと」ではなく「読むこと」で実施します。

☆科目構成の見直し

特に共通必修科目である「現代の国語」及び「言語文化」は、旧課程における「国語総合」を単純に分割したものではありません。平成28年12月の中央教育審議会答申で示された、高等学校国語教育の次のような課題を受けて改編された、「全く新しい」科目です。

■現代の国語

「話し合いや論述などの『話すこと・聞くこと』、『書くこと』の領域の学習が十分に行われていない」

■言語文化

「古典の学習について、日本人として大切にすべき言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらない」

これらの課題を解決するための授業実践こそが、国語科教員の責務です。この新しい科目を各学校の実態に合わせどのように定着させるか。国語科教員全員の意識改革が求められています。